

## メッセージアウトライン 出エジプト記32:1~35 「金の子牛」

イスラエルの民はモーセを通して十戒(20:1~17)及び他の律法(20:22~23章)を与えられた。そして、民はみな声を一つにして、「主の言われたことはすべて行います」と誓約した。(24:3)

アブラハム、イサク、ヤコブと代々更新されて来た主なる神との契約は、ここで民族としてのイスラエルとの契約となる。

その後、主はモーセを呼び寄せられ、彼は再びシナイ山の主のもとに上って行った。それは「おしえと命令」が書き記された石板を彼に授けるためであった。(24:12~13)

[24:15-18]「モーセが山に登ると、雲が山をおおった。主の栄光はシナイ山の上にとどまり、雲は六日間、山をおおっていた。七日目に主は雲の中からモーセを呼ばれた。主の栄光の現われは、イスラエルの子らの目には、山の頂を焼き尽くす火のようであった。モーセは雲の中に入って行き、山に登った。モーセは四十日四十夜、山にいた」

25~31章においてモーセは山の上で、いけにえの種類とそのささげ方、礼拝の仕方、幕屋の構造とその作り方、使用すべき材料、揃えるべき備品等の詳細を教えられ、神の指で書かれた石板二枚を授けられた。

[32:1]「民はモーセが山から一向に下りて来ようとしなのを見て、アロンのもとに集まり、彼に言った。『さあ、われわれに先立って行く神々を、われわれのために造ってほしい。われわれをエジプトの地から導き上った、あのモーセという者がどうなったのか、分からないから。』」

モーセが山に登ったまま四十日間も戻って来なかったことはイスラエルの民に大きな不安を与えた。人は今まで頼ってきた指導者がいなくなると、動揺して間違った方向へ走りやすい。モーセも何日後に帰って来るとは言わなかったし、そんなことは分からなかったであろう。彼はシナイ山で主との交わりのうちに、時間も忘れて過ごしていたのであろう。モーセの帰りを待っていた民はついに我慢できず、アロンのもとに集まって、われわれに先立って行く神々を、我々のために造ってほしいと願う。これは数々の奇跡によってエジプトから脱出したことを経験し、ここに至るまでも超自然的に守られ、そしてモーセを通して律法を受けたばかりの民の言うこととしては、あまりにもひどいことばである。彼らはモーセを待ちきれなくなって、自分たちで目に見える神を造って、その神の導きのもと、約束のカナンの地へ上って行こうと考えたのであろう。まことの神から偶像の神へ、あつというまに転落する、恐ろしい背教、恐ろしい人間の罪の姿である。

[2-3]「それでアロンは彼らに言った。『あなたがたの妻や、息子、娘たちの耳にある金の耳輪を外して、私のところに持って来なさい。』民はみな、その耳にある耳輪を外して、アロンのところに持って来た」

律法を受け、主なる神と契約を結び、「主の言われたことはすべて行います」と誓ったばかりのイスラエル。その律法の中には「あなたには、わたし以外には、ほかの神々があってはならない。偶像を造り、それらを拜んではならない、それらに仕えてはならない」(20:3-5)との戒めもあった。それゆえアロンはモーセの兄として命にかけてもこのような申し出を拒絶するべきであった。しかし彼は民に彼らの耳にある金の耳輪を外して自分のところに持ってくるようにと言ったのである。

あるいは金の耳輪はエジプト脱出にあたって、彼らがエジプト人たちから得た貴重な財産であったので、このように言うことによって、彼らはその願いをあきらめるかもしれないという思いがあったのかもしれない。しかし、話の流れから言えばアロンが彼らの勢いに恐れを感じて、偶像を造り始めたと考える方が真実に近いと思われる。

[4]「彼はそれを彼らの手から受け取ると、のみで鋳型を造り、それを鋳物の子牛にした。彼らは言った。『イスラエルよ、これがあなたをエジプトの地から導き上った、あなたの神々だ。』」

これは実際に型枠を造って、そこに金を流し込み小牛の形にしたというよりも、木材のみで小牛の形に彫刻したものに、金を張り付けて造ったのではないかと考えられる。このほうが後に出て来る記事とよく合う。しかしなぜ小牛なのか。その理由は、若くて強い雄牛の像はエジプトやパレスチナにおいてよく用いられており、牛は力と多産の象徴であった。イスラエルはエジプトにいたときからこの小牛の像を見慣れてきたことであろう。それでアロンは金の子牛の像を造ったのであろう。イスラエルの民はそれを見ると、主なる神と結んだばかりの契約を忘れ、「これが…あなたの神々だ」と真顔で言い出したのである。何と恥知らずな…。

[5-6] アロンはこの小牛の前に祭壇を築き、「明日は主への祭りである」と民に言った。翌朝早く彼らは全焼のささげ物と交わりのいけにえを供えた。

「全焼のいけにえ」…全き献身をあらわす。羊、やぎ、牛をささげる。

「交わりのいけにえ」…民の罪のためのいけにえ。羊、やぎ、牛、はとをささげる。

「民は、座っては食べたり飲んだりし、立っては戯れた」…これは性的な交わりを含むものであった。このような姿は全く異教の宗教行事との混合である。人間の墮落した罪の性質のゆえに、彼らは簡単にこのような方向へ転がり落ちていくのである。主なる神が契約を結び、律法を与えて聖なるものとしようとしておられるイスラエルはこのような民であったということを忘れてはならない。

[7-13] 主はモーセに民は墮落してしまったので、急いで山から下りていくようにとうながされた。(7) 主はモーセに民が早くも主が命じた道から外れて金の子牛を造

り、それを礼拝するようになったことを告げられた。(8) 主は彼らを大いに怒られ、彼らを滅ぼして、その代わりにモーゼの子孫を大いなる国民とすると言われた。(9~10) 「うなじを固くする」…強情で言うことを聞かないこと。

しかしモーゼはこのイスラエルの民のために嘆願する。(11~13) その内容は

①イスラエルの民は主が力と力強い御手をもってエジプトの地から導き出されたご自分の民であること。

②主がもし民を滅ぼされるなら、エジプト人から主ご自身があざけられ、そしられることになる。

③先祖アブラハム、イサク、ヤコブに主ご自身が与えられた契約の永続性、有効性への訴え。

[14]「すると主は、その民に下すと言った災いを思い直された」

モーゼの心からの熱心なとりなしにより、主はイスラエルの民に下すと言った災いを思い直された。モーゼは主が決められたことだからしょうがないとは思わず、イスラエルの民はご自分の民であること、主がエジプト人から受ける良くない評価、イスラエルの先祖以来の契約の有効性に訴え、その結果、主は民への災いを思い直されたのであった。彼らの先祖アブラハムも甥のロトとソドムとゴモラの町のために、そのようにとりなしをした。→創世記18:20~33

主なる神は冷酷な機械のようなお方ではなく、愛とあわれみに満ちたお方であり、みこころにかなった祈りを聞いてくださるお方なのである。

[15-16] 民のためにとりなしの祈りを終えたモーゼは神が書かれた二枚のさとの石板をもって山を下りて来た。伝統的な解釈ではそこには十戒が刻まれていたと考えられる。

[17] モーゼのそばには彼の従者ヨシュアがいた。ヨシュアは山の途中で彼のために待機していたのである。→24:13 彼らが山のふもとに近づくとつれて、民が大声で叫ぶ声が聞こえて来た。ヨシュアはそれを聞いて「宿営の中に戦の声があります」と言った。

[18]「モーゼは言った。『あれは勝利を叫ぶ声でも敗北を嘆く声でもない。私が聞くのは歌いさわぐ声である。』」

民はアロンが造った金の子牛の周りで歌い、踊り、乱痴気騒ぎをしていたのであろう。

[19-20] 金の子牛と民のみだらな踊りを見た時、モーゼの怒りは燃え上がった。山の上においてまだ何も見ていない段階では、比較的冷静であったモーゼであったが、民の乱れた姿と金の子牛を見た時にさしも柔和なモーゼも怒りを爆発させたのであった。普段柔和で穏やかな人ほど、本気で怒らせると恐ろしいのである。そして彼は主から受けたあの二枚の石板を投げ捨てて山のふもとで砕いてしまった。さらに金の子牛を取って火で焼き、それを粉々に砕いて水の上にまき散らし、イスラエ

ルの民に飲ませた。粉々に砕いたのは子牛の形に刻んだ木材の方でそれを覆っていた金は溶けてしまったであろう。なぜそれを飲ませたのか。それは彼らの罪の結果を目に見える形で彼ら自身に引き受けさせ、またそれに耐え、その罪を償わなければならないしるしとして、そのようにしたのではないかと考えられる。

[21] 偶像を破壊した後で、モーセはアロンに詰め寄り、この事件の責任者としての説明を求める。

[22-24] アロンは責任逃れの作り話をする。「あなた自身、この民が悪に染まっているのをよくご存じのはずです」(22) アロンはまず、モーセ自身が民の悪いのを知っているはずだから、このような事件が起こることは当然予想できたはずだと暗にモーセの方に落ち度があったように言う。彼は自分の失策は全く語っていない。

「……私がこれを火に投げ入れたところ、この小牛が出て来たのです」(23-24) 誰が聞いてもこのようなことは信じないであろう。全くの責任逃れである。しかし、このような恐るべき結果をもたらしたアロンの責任は重大である。この箇所には書かれていないがモーセは彼のために必死のとりなしをする。→申命記9:20 もしモーセがとりなしの祈りをしなかったならば主は彼を滅ぼされたことであろう。

[25-29]「モーセは、民が乱れていて、アロンが彼らを放っておいたので、敵の笑いものとなっているのを見た」(25) 民は髪や衣服を乱して性的に乱れた状態であったのであろう。敵とはイスラエル人に滅ぼされずに残っていたアマレク人であろう。彼らは常にイスラエル人の動静を探っていたようである。この様子を見たモーセは宿営の入口に立って言った。「だれでも主につく者は私のところに来なさい」(26) すでに十戒や他の律法は民に伝えられ、民はそれを知っていたはずである。→出24:3-4 彼らはちゃんと誓約をしているのである。それゆえ彼らは偶像を造ることも拝むことも、これに仕えることも固く禁じられていることも知っていたはずである。それゆえイスラエルの民が金の子牛礼拝の乱痴気騒ぎをしていた時に、それに加わらなかった者もたくさんいたと考えられる。

「すると、レビ族がみな彼のところに集まった」レビ族はモーセとアロンが属する部族である。彼らは乱痴気騒ぎをしている群衆を苦々しい思いで見っていたのであろう。

モーセは彼らに言った。「イスラエルの神、主はこう言われる。各自腰に剣を帯びよ。宿営の中を入り口から入口へ行き巡り、各自、自分の兄弟。自分の友、自分の隣人を殺せ」(27) これはモーセ個人ではなく主の命令であった。宿営の中には彼らの兄弟、友、隣人がいたが、彼らは主の命令を忠実に言い、民のうち約三千人が倒れたのであった。(28) これはイスラエルの民全体から考えると比較的少数であったかもしれないが、これだけの人数が一日で殺されたのであるから、民にとって大きな痛みと悲しみとなったことであろう。

「モーセは言った。『あなたがたは各自、その子、その兄弟に逆らっても、今日、主

に身を献げた。主があなたがたに、今日、祝福を与えてくださるように。』(29)「身を献げる」とは主のわざ、主の戦いに加わることであり、そのようにして主に従ったレビ部族は祝福を受けるものとなるのである。

彼らは後に神殿で主に仕える祭司とレビ人の部族となる。

[30]「翌日になって、モーセは民に言った。『あなたがたは大きな罪を犯した。だから今、私は主のところへ上って行く。もしかすると、あなたがたの罪のために宥めをすることができるかもしれない。』」

罪を犯した者たちをさばくことによって、すべてが解決したわけではない。民の犯した偶像礼拝の罪に対する主の怒りは激しい。それゆえモーセは民と主との間に自分が立って、主の怒りを宥めようとする。「もしかすると…」これは漠然とした希望的観測ということではなく、自分の身を投げ出して民の罪の赦しを得ようとする覚悟から語ったことばである。彼はそのためによりをかけようと決意している。

[31-32]「そこでモーセは主のところへ戻って言った。『ああ、この民は大きな罪を犯しました。自分たちのために金の子牛を造ったのです。今、もしあなたが彼らの罪を赦してくださるなら——。しかし、もし、かなわないなら、どうかあなたがお書きになった書物から私の名を消し去ってください。』」モーセは民の罪の赦しのために必死の嘆願をする。彼は自分のいのちを代償として民の罪の赦しを願う。「あなたがお書きになった書物」…救いに入れられ、永遠のいのちを与えられている者の名が記されている書物。→黙示録20:15

[33-34]「主はモーセに言われた。『わたしの前に罪ある者はだれであれ、私の書物から消し去る。しかし、今は行って、わたしがあなたに告げた場所に民を導け。見よ、わたしの使いがあなたの前に行く。だが、わたしが報いる日に、わたしは彼らの上にその罪の報いをする。』」

モーセの必死のとりなしによって、民は決定的な滅びからは救い出される。しかし、同時にしかるべきさばきの日に彼らの罪がさばかれなければならないことも告げられる。モーセは引き続きイスラエルの民を約束の地へ導くことを命じられる。

[35]「こうして主は民を打たれた。彼らが小牛を造ったからである。それはアロンが造ったのであった」

ここでは32章で起こったイスラエルの民への主のさばきが、まとめとして記されている。

今日の箇所から教えられることは何か。

- ①人間の性質…いかに罪に走るのが早いか。神との契約を守らない。恩知らず。不信仰。すぐに偶像礼拝をする。目に見えるものを神とする。
- ②神の性質…義であり聖である。罪を見過ごされない。愛とあわれみに満ち、人間の悔い改めととりなしを受け入れられる。

モーセは自分のいのちをかけてイスラエルの民のためにとりなしをした。もし彼の

とりなしがなかったなら民はどうなっていたであろうか。

後の時代、旧約聖書に記された約束のとおり、神から遣わされた神のひとり子イエス・キリストは私たちを愛し、ご自分のいのちを投げ出して、十字架上で私たち人間のためにとりなしをしてくださった。その身代わりの死のゆえに私たちの罪は赦されるのである。私たちは偶像礼拝だけではなく、ほかにも多くの罪を犯す。イスラエルの民がさばきに会うのならば私たちも当然さばきに会うであろう。しかし、イスラエルの民がモーセのいのちをかけたとりなしによって滅びを免れたように、私たちすべての人間も神の御子イエス・キリストのいのちをかけたとりなしによって救われるのである。このイエス・キリストの十字架の死による贖いによってイエスを自分の救い主と信じ受け入れる者は、その罪が赦され、救われるのである。→ヨハネ3:16、ローマ3:21～26